

房総中世城館の発展過程

小 高 春 雄

目 次

1. はじめに	365
2. 城館研究の前提	365
(1) 年代比定について	365
(2) 城郭プラン・遺構	367
(3) 出土遺物	368
3. 前節から導かれた房総城館の流れ	378
4. 終わりに	382

1. はじめに

県内で確認されている城郭数、及び、何らかの発掘もしくは測量調査の手を経ている例は、関東否全国的にみても出色のものと言わねばならない。とはいえ、この豊富なデータを有効に活用し、房総城館の成立から終末までの流れを概観した作業という、以外に少ない。これは、一つには、在地に根ざした研究者の不足という面もあるだろうが、県・市町村に身を置く文化財担当者にとって、やはり未だに「領域外の分野」という感覚も手伝っているのでは、と推測する。その要因に有力な戦国大名に欠けるとか、著名な近世城郭に乏しいとかの事情が挙げ得ようが、また、一種の停滞ともいべき現状も垣間見える。

本稿企画の意図は必ずしも新しい地平を示したものではないが、要は基本に立ち返って何が言えるか、を筆者なりに実践したものである。ある意味では、房総という地域のなかの城郭を追い続けた者の、多分に感覚に満ちた提案と受け取ってもらってもよい。

2. 城館研究の前提

本県における城郭研究の軌跡及び現状分析については、既に実績がある（千葉城郭研究会 1997・県教委 1996・井上 2000他）⁽¹⁾。しかし、ここではあえてそれにとらわれず横断的に検討を加えたいと考えている。なぜなら、分野・立場を異にした分析はやはりそれ以上のものではなく、結果としてかみ合わないものになる恐れがあるからである。

(1) 年代比定について

城郭の年代を正しく導き出す作業は重要である。それによっていつ頃の城かという出発点が見いだせるわけで、それがひいては地域史を編むことにつながるからである。また、城郭そのものの変遷過程といった点もしかりである。

では、その方法としてどんなものがあるかだが、大きく次の3点に絞られるのではないか。

- (1) 伝承・系図・古文書等
- (2) 城郭プラン・遺構
- (3) 出土遺物

以下この順に沿って検討する。

- (1) 伝承・系図・古文書等

私もそうだが、地元に着した情報を集めようとすれば、まず郷土誌からあたることになる。その場合、近世の地誌類はさておき、大正期の県誌⁽²⁾、郡誌⁽³⁾などはまずその出発点になるであろう。ただ、問題なのはその記述にあたって、多くの場合、何に拠ったか記してないことである。よく伝承によればという文言で、城主は誰々という場合があるが、それも巷間に伝えられた伝承なのか地元の寺院縁起や記録また軍記物等に拠ったのかわからないことが多い。ただ、よく吟味すると、案外後者がもとになっている例が多いことに気付く。

言うまでもないことだが、史料を引用する場合はその史料名はもちろん、異本の存在や成立ないし書写年代等の吟味も必要であって、この点、伝承の世界ではその基本的な部分が欠落しているわけである。それゆえ、引用する場合はそのことを何らかのかたちで記す必要があるし、また、その点がはっきりしないのであれば、登場人物や時代等何れも参考程度の域を出ないと心得るべきである。

だが、更に問題なのは、系図・家譜の類であって、それらのほとんどが近世の成立で且つ恣意的な側面もあることを思えば、尚更である。しかし、一旦それらが活字化されると一つの史料として一人歩きするようになる。「群書類従」所収の諸家系図⁽⁴⁾をはじめとして、「房総叢書」に収められた房総所縁の諸家系図⁽⁵⁾などは、さしあたって手にするものといえる。その人物名はもちろん、おおまかな年代推定が容易なこと、及び居住地の情報も添えていたりなど、城館との対応上好都合な一面がある。戦後しばらく無批判に活用された所以でもあろう。

とはいえ、系図・家譜は誰が築き、そこに居たかという、城の主人公を具体的に指示する点で、これからも大いに活用されるであろう。要はそれらが、いつ誰によって作成され、その元になった史料が何であるか、について留意しておくことで事足りるはずである。つまり、そのような能力までを身に付ける必要はないが、史料そのものの分析に及んだ論文や、原典や異本に当たることによって少なくとも大きな過ちを防ぐことが可能となろう。

例えば、安房里見氏の場合、義豊―義堯へ至る家督や政権交代劇は従来近世の軍記物で説明されてきた経緯があるが、実際は可成りの違いがあることがわかっている。しかもその原因が勝者である義堯の側からなされた正当性のアピールにあったらしい⁽⁶⁾。戦国期では家督交替が一族や家中の政権抗争の結果継承されることが多く、しかも、このようなことは多かれ少なかれ房総諸家に共通することである。

ただ、この点も近年は研究の進んでいるところなので、そういう情報収集を心がけることが肝要である。

その一方、古文書・記録の類はその当時の史料であり、前二者よりはるかに実態に即した検討が可能となる。本県では、戦後の二度の県史編纂の成果（昭和20年代、平成3年～）―『千葉県史料』中世篇県内・県外、『千葉県の歴史』資料編中世1～4―の他に、ほぼ出揃っている各市町村史を瞥見することによって、関係する史料も一通り検索しうるだろう。だが、問題は個別の城郭への対応である。

というのは、文書のなかでは「〇〇城」というようなかたちで登場しないことである。この点は一般の人々にとって大きな「誤解」であって、通常「〇〇（地名）」・「〇〇之城（地）」また「〇〇要害」というように登場することである。つまり、久留里城なら「久留里」、関宿城なら「関宿」ないし「関宿之城（地）」となる。近世では、城の数が限られており、その地には固有名詞の城があるので間違えることはない。しかし、中世では一地域に複数の城があることも多く、しかも地名自体が現在よりも広範囲を指すことが一般的であることを思えば尚更である。また、破却や最終的な改修を経ていることも考慮しなければならない。つまり、〇〇とあっても簡単に比定するわけにはいかないのである。現地の城の実態を見ずに中世史の研究者がよく犯す誤りが実にここにある。それに、考古学分野の研究者がしばしば追随するものもお互いの事情がわかっていないからである。

文書の年代比定についても実は問題がないわけではない。実は中世文書とりわけ城が頻繁に登場する戦国期の文書の多くは書状形式であって、普通は年号が入らない。ではなんで年代比定をしているかといえ、花押形の推移つまりある人物の花押形の変遷それも年代が押さえられる例を辿ってそうでない例を推定しているのである。また、文書のなかの文言や事件、登場人物・官途（受領）名なども手掛かりとなる。

それゆえ、中世史研究者が〇〇年の文書のなかに〇〇城が登場する、と言った場合、その根拠を一応質しておく必要がある。

とはいえ、上記のような注意をはらえば、〇〇の城がいつ頃に存在し、そこに誰が居たかという最も基本的かつ確かな情報を得られる点で、城郭の年代を論ずる場合、一方の根拠となろう。ただこのことはその城の築城年代もまた廃城年代も意味しないこともろんである。

(2) 城郭プラン・遺構

よく、山城・平城・平山城、居館、また、居館と詰の丸などという言葉を引き。そしてこれらがある程度の年代的な背景をもって理解されている傾向がある。つまり城郭の変遷にはある一定の法則性があるという感覚である。

この「感覚」とはいったいどのように醸成されたかといえば、既に戦前に遡るわけで（例えば鳥羽正雄著『日本城郭史』他）、戦後もしばらくはその延長線上にあった。それが、昭和40年代後半頃から城郭遺構を図化しその比較検討から年代や性格を論ずる試みが見られるようになった（例えば小室栄一氏や伊礼正雄氏等）。縄張図の分野で蓄積著しい中世城郭研究会が旗揚げしたのもこの頃で、その16年後の雑誌（『中世城郭研究』）創刊以後の活動はいわずもがなである。折しも、この昭和60年過ぎは主に開発に伴う発掘調査例の増加から埋文担当者が城郭研究に参画し、測量図（に基づいた縄張図）や出土遺物から、立地・構造の変遷、また、中世館跡の諸問題に一定の道筋を付けた頃でもあった。

それでは、翻って本県における状況はというと、県内を概観した研究は未だないというべきだろう。ただ、一般的な理解として、城郭遺構を構成する個々の要素—曲輪・堀・土塁・虎口・石垣など—の規模や特徴からその新旧を推し量ることが出来る、という点はある。例えば、それが必ずしも本県の研究実績から導かれたものでないとしても、自然地形を大きく改変して人為的に曲輪取りをしたり、広い堀幅・深い堀、堀の折歪、堀内障壁、虎口の馬出・枡形、高石垣などは、少なくとも戦国期でも新しい要素として認められている。

しかし、である。ここ数十年の縄張図の蓄積や地域的な中世史研究の進展からすれば、本県でもその変遷を編む試みが更になされてしかるべきではあった。それがなぜ出来なかったかといえば、城郭の年代を決定するkey—出土遺物—を考古が握っている、との認識があって、それゆえ、その研究主体が考古分野に移らざるを得なかったという事情から生じたものと理解している。

だとすれば、逆に発掘の成果からその変遷を追うことが可能ではないか、というより、それは出来ないのだろうか？という疑問が当然あろう。実はここに立場を異にする大きなギャップがある。というのは、一概に出土遺物といってもその編年研究が「確立」しているのは陶磁器のみにすぎない（これにかかわらずも加えてよいかもしれないが）。この「確立」にしても、例えば本県の場合陶磁器の主流となるのは「瀬戸・美濃」製品であるが、それはあくまでも生産遺跡かつ窯跡出土の一括資料に対し、年号が記されている例や消費地での出土状況（記録により年代が明確な遺跡地等）などからその生産年代を割り出したものであって、それが出土したからといってイコールその城跡の年代を示すものではないということである。

これはどういうことかということ、出土した陶磁器はその年代よりあとに城に持ち込まれたことを示すものの、その城がそれ以前やその後に使用されていた可能性を打ち消すものではないということである。つまり、ものさしをどう使うかは研究者にまかされているのであって、万能ではないということである。こ

の点をよく理解していない埋文担当者が実は以外に多いことを思えば、縄張研究者更には中世史研究者においておやというべきである。

一つの例を示そう。芝山町田向城跡は縄張研究者によって「天正期の遺構」と評価された城である（『田向城『図説中世城郭事典一』』）。ところが、刊行から数年後、田向城跡はそれから約2年半の歳月をかけて全面的に発掘調査された。出土陶磁器は約60片と、丸掘りかつその面積の割に少ないのだが（結構こんな例もあるにはあるが）、それを現在の編年でみる限りでは15世紀の前半から16世紀の中頃—それも量的主体をなすのは15世紀後半—ということになる。このような場合、どういう結論を下したらいいのだろうか。従来のやり方に従えば、併記する場合は良心的ながら、遺物の「年代観」（最も新しい遺物ならともかく量的中心に）をそのまま城の「年代」とするのが普通であった。

ところがである。この一つの曲輪の盛土中から鉄砲玉が出土しているのである。鉄砲はその出現年代が特定できる点で極めて有効的な遺物であり、しかも文献のうえでもある程度確認できる利点がある。詳しくは後に述べるが、それが出土したならばやはり永禄期以降（1558～）と見るべきであろう。その意味で、報告者が「築城の年代はこれ（天文12年の鉄砲伝来：筆者捜入）よりもさか上ることがないことだけは確実」（註7）としたのは蓋し当然である。

このように、縄張と出土遺物の間には、その年代を巡ってまだまだ越えがたい溝があるように思える。ただこの溝は考古学がともすれば陥りやすい落とし穴としての側面があると考えている。畢竟それは遺物を一つのものさしとして見続けるかぎり惹起する問題といってもよい。これを理解するためにも次ぎの項へ移ろう。

（3）出土遺物

中世の出土遺物は多岐に及んでいる。その中で年代比定に使われるものとして、既にあげた陶磁器はもちろんのこと、およそ次のようなものが挙げ得よう。

- ①陶磁器
- ②かわらけ他
- ③石塔
- ④銭貨
- ⑤鉄砲玉

以下その有効性並びに課題を述べる。

①**陶磁器** 一口に陶磁器といっても陶器と磁器、産地、焼成方法、器種によって様々な分類が可能となる。ただここで問題とするのは、ものさしそれも本県についてのそれであるから、主に中国陶磁と国産なかでも瀬戸・美濃産陶器、それに常滑に限って述べることになる。

中国陶磁については、既に研究の蓄積がある。もちろん、それが主に美術工芸分野によって進められたきらいはあるが、今日発掘調査例から編年案を提示する試みは一二にとどまらない。とりわけ、古い時代（15世紀代以前）には陶磁そのものの出土量が少ないので、年代比定をする上で大きな位置を占めている。ただ、折に触れ指摘されていることではあるが、その生産年代と消費年代は異なるという点は認識しておかねばならない。これは窯跡での一括資料による研究が彼の地で不十分なことによるが、舶載品かつ長期にわたって「伝世」する点からしてそれも当然なのだが、それが必ずしも一定の年限でスライドするわけ

ではない。とはいえ、主要城郭それもその中心部を調査した場合では質量共に豊富で、真里谷城⁽⁸⁾、一宮城⁽⁹⁾などはその良い例といえる。共に、染付+白磁中心の様相は同じながら、一宮では新しい要素—小野編年染付皿B 2群、E群、漳州窯製品⁽¹⁰⁾—が加わっており、一つの傾向と捉えられるであろう。

それに対して、瀬戸・美濃産陶器はもちろん国産ということもあるが、窯跡での一括資料（必ずしも短期間とは限らないが）を年代が明らかな消費地の資料と対応することによって、可成りの精度で遺跡そのものの年代幅を計るものさしとなる。また、消耗品としての性格（器種にもよるが）もより有利に働いている。本県の城郭の年代比定も多く瀬戸・美濃製品の恩恵によること言うまでもない。それゆえ、この編年案の現状と課題についてまず述べておきたい。

瀬戸・美濃といっても、今日それはほぼ井上喜久雄、藤沢良祐両氏の業績を紹介するに等しい。とりわけ、藤沢氏は近年精力的にこの分野に取り組んでおり、その成果は編年案のみならず、その生産体制・流通を含め多岐に及んでいる⁽¹¹⁾。こと城館との対応でいえば、やはり窖窯後半～大窯編年の進展であろう。

まず、藤沢氏は古瀬戸⁽¹²⁾後期様式（器形は天目茶碗、平碗、小皿、深皿、播鉢等）を4期に区分し、それぞれⅠ～Ⅳ期（後Ⅰ期、後Ⅱ期、後Ⅲ期、後Ⅳ期（古）・後Ⅳ期（新））と呼称した。その根拠は窯跡採集遺物における「すべての器形の型式の組み合わせが変化する時点」で小期を設定したという。そして、その年代比定は、紀年銘資料や災害・炎上・廃城の記録から廃絶年代の「明らかな」出土資料に拠っている。

紀年銘資料は最も確実で、少なくともそれ以降の製品ということになるが、後者は遺跡と記録との整合性が立証されたとは言い難く問題もあるとみる。ただ何れにせよ大差はなく、要はそのことを考慮して判断すれば充分であろう。

次に、大窯編年であるが、窯跡の一括資料と、それに基づく型式変遷、更に新器種の登場などから画期を設定し、それに前述した紀年銘資料や廃城年代の「明らかな」出土資料などから年代を与えている。すなわち、それまでの5期区分に疑問を示し、「大窯の主要器種の型式分類を行い…中略…主要な器種の型式の組み合わせにより、11個の小期に細分することが可能」となったとし、更にそれを型式変遷から大きく3様式に区分した。その後、この作業は明確に4期8小期区分（Ⅰ期：1・2小期、Ⅱ期：3・4小期、Ⅲ期：5・6小期、Ⅳ期：7・8小期）としてまとめ直された。今日みる編年案の大枠が提示されたのである。

ただ、氏の言葉によって説明すると、未だ「年代観についても流動的な要素が」みられ、また、「消費地においても築城、廃城年代が古文献等により推測される城館址の年代観と、出土する大窯製品の年代観にズレがあることが度々指摘されて」おり、その結果、「そもそも大窯の編年観は、城館址の年代観に拠るところが多く、本来ならば両者は整合性をもつはず」で、それが不整合であるということは、「生産地の編年に不明瞭な部分」が多く、「その成果が消費地で充分活かしきれ」ないこと、また、「消費地における資料操作の方法に原因がある」というのである。近年においても細部の手直しがなされ、その情熱は止まるところを知らない。

それゆえ、自らというわけでもあるまいが、大窯製品を出土した東海地方西部の代表的な城館跡について、そのあり方を分析し、その結果を次のようにまとめている。

- ①出土陶磁器・かわらけ等の組成は調査した遺構の性格を反映しているらしいこと。
- ②その遺跡で出土した最新の遺物から、ⅠないしⅡ段階古いものが多く見られる傾向があること。具体的

には、天目茶碗、小皿類ではⅡ段階、播鉢ではⅠ段階といった具合で、これはその使用のサイクルと関係するであろうこと。

そして、そのことから、出土した瀬戸・美濃製品は直ちにその城館の年代に直結しないが、播鉢のみはその性格上有効な指標となることを述べている（近年では大窯後半以降様々な系統の存在に注目しているが）。

恐らく、藤沢氏はこれからもその流動的な要素を払拭すべく努めるであろうし、それは近著でも明らかである（消費地における最新の調査結果をふまえた実年代の提示や時期区分の妥当性など）。その意味では、むしろ上述した課題を熟知したうえで、下限や上限を押さえられる出土例のあり方、つまり、消費地からも積極的な情報を寄せるべきで、数多くの事例を検討するなかで誤差が徐々に解消されていくはずである。

翻って、本県の現状はどうかというと、確かに本県は関東地方のなかでも有数の発掘調査例を有し、当然、中世もその例に洩れない。しかし、遺跡調査に携わる専門職員はほとんどが原始・古代専門で、城郭を研究テーマとする者は極めて低率であった。城郭は多くトレンチ調査で終わり、中世遺跡も塚や墓地を別にすれば「段切り」や「台地整形区画」などと、遺構の形状による報告がしばらく行われていた経緯がある。当然、報告された陶磁器も形になるもの程度で、器種毎、生産地毎の集計とも無縁であった。その意味で、最初に本県の陶磁器を概観した小野正敏氏が扱った城館が4遺跡（一宮、真里谷、大多喜、臼井）⁽¹³⁾であったという事実は蓋し当然でもあったが、真里谷を除けば概報のみでその実態はやはり闇のなかにあった。

とはいえ、近年ようやく上に述べた藤沢氏の編年や指摘が生かされようとしている。井上哲朗氏や築瀬裕一氏による調査報告には詳細な器種・産地比定及び組成表が掲載され、本佐倉城の調査では曲輪別に集計することにより、その組成の違いが明らかとなり、ひいてはその性格の相違に発展しえた。とすれば、過去の調査例も遺物が存在する限り調査対象になるわけで、今後は意図的な掘り起こしも必要となろう（一宮城はその一例）。

しからは、そういう作業を継続することで城館の年代は解決するかというと、短期的には問題もあるとみる。というのは、房総出土の瀬戸・美濃製品の実態が明らかになるにつれ、その地域差も漸く日の目を見ようとしているからである。この地域差とは、房総ではある程度まとまって出土するのはせいぜい大窯Ⅰまでで、Ⅱ期以降は少ないということである。その結果、ほとんどの城郭が15世紀後半～16世紀の初め頃に比定されるという事態となったからである。

ところが、現実には文献の上で現れる城は圧倒的に16世紀代が多いわけで、これは確実である。とすれば、両者の接点はどこにあるのか、ということになる。その結果、15世紀代の城と16世紀代の城には断絶があり、16世紀代には中小城郭から拠点城郭へと収斂していった結果であるというような考えも生まれた。しかし、後に述べる真里谷城他の成果—古瀬戸後期～大窯Ⅰ期を中心とする—は必ずしもそうとはいえない結果を示している。

つまりそれは、大窯の編年が全体として更に下る結果であるともとれるが、また、相対的にⅡ・Ⅲ期が短かったとも解される。あるいはまた、Ⅱ期以降、房総への搬入が滞った、ないし、需要に変化が生じた、というような事情があったかもしれない。実は、報告書の瀬戸・美濃製品をチェックすると、僅かだがⅡ期以降の製品も散見され、更に、藤沢氏が先に提示した解釈、つまり播鉢などの消耗品が最も有効な

がらそこにおいてもⅠ段階前の様相を示すという点、を考慮すれば尚更である。

とすれば、この16世紀とりわけ後半に築かれた城などは、本来遺物量が少ない訳で、更にその性格——時的な取立ないし番手城のような——によっては、極端な例もあろう。また、改修はもちろん中世の集落・寺院ないし前代の城郭のうえに新規に築城したような場合、まったく異なった解釈を生む可能性もある。具体的に言うと、小林城⁽¹⁴⁾、北ノ作遺跡⁽¹⁵⁾、篠本城⁽¹⁶⁾などの例である。

何れも、報告者が中世の陶磁器について知識があり、しかも詳細に報告が行われているケースである。むしろそれだからこそというべきかもしれないが、小林城が古瀬戸後期～大窯Ⅰ期、北ノ作が古瀬戸後期Ⅳ～大窯Ⅰ期、篠本城が古瀬戸後期～大窯Ⅰ期というように、瀬戸・美濃産の大まかな時期的スパンは類似する（ただ、北ノ作では大窯Ⅱ・Ⅲ、篠本も大窯Ⅱ期の製品が僅かながらも出土している）。それゆえか、報告者は小林城が15世紀後半（当初は16世紀半ば）、古屋城跡が15世紀代、篠本城が13世紀～15世紀後半と規定する。しかし、古屋城における障子堀や屈曲した堀、小林城における虎口構造（大規模な堀と土塁による横矢掛け）、篠本城における台地全体を深い空堀で幾つかに画した多郭構造、が15世紀代であるとすれば、それは地域的な城郭構造の変遷上十分に説明しうるのだろうか。この点、前二者を担当した井上哲朗氏は筆者の問いに対し逡巡していてもいるようで、それはそれでむしろ妥当な軌跡というべきではなかろうか。

更に一つの事例をあげよう。柴田龍司氏は15世紀中葉を境にそれまでの集落や居館が廃絶し、かわって再編された村落構造から生み出された「村落型城郭」が成立したが、16世紀中葉には城下町を「内包」した惣構構造からなる「都市型城郭」が成立する、とした⁽¹⁷⁾。個々の事例から進んで城郭の画期を中世遺跡全体のなかで位置付けようとした姿勢は評価できるが（詳しくは柴田氏の論考を参照されたい）、扱った遺跡が少ないということ、埴谷周路や池ノ尻のように年代や性格等問題のあるものも含まれ、結果としてむしろ一つの試論を提示した感がある。だが、ここで問題としたいのは、ある意味ではこのように中世史や地域史と接点を有する内容でありながら、その年代的根拠は瀬戸・美濃産の陶磁器に頼って進められている点である。柴田氏に限ったことではないが、馬洗城のようにほぼ全掘にもかかわらず僅かな遺物しか出土しなかったことや、「都市型城郭」における大窯製品の割合（とりわけ対応する大窯Ⅱ、Ⅲ期）はもっと問題にされてよい。前者はもし15世紀代から継続した、ないしその上に築かれたというケースの場合、多くの窖窯製品のなかで埋もれてしまった可能性があるし、後者は文献との対応が可能な拠点城郭が多いという点で、逆に陶磁器のあり方を検証できるからである。

このように、瀬戸・美濃製品はそれ自体が有する年代的属性と出土した城館の年代が無批判に受け入れられてきたきらいがある。換言すれば、城館から瀬戸・美濃産陶器が出土したからといっても、それがそのままのさしになるわけではない。出土状況、器種構成や点数、陶磁器全体やかわけなど焼物全体のなかでの検討はもちろん、他の出土遺物や文献との対比、更に地域史のなかでの位置付けなど、あくまでも一つの目安として用いるべきであるというのが私の結論である。

次に常滑であるが、知多半島で生産された中世陶器をさし、その器種も多岐にわたっている。だが、ふつう常滑といえば褐色でかつ独特の肌合いをみせる大甕である。

この常滑も戦後に至り窯跡の発掘調査が本格化し、植崎彰一、杉崎 章、赤羽一郎等を始めとした研究者によって編年作業が進められたが、今日研究をリードしているのは「窯における共伴関係を重視した」中野晴久氏である⁽¹⁸⁾。その歩みは中野氏も述べている如く決して平坦ではなく、恐らく今後も四半世紀

ないし型式によっては半世紀位の修正もあろうかと思われる。その理由が紀年銘ないし年代の明らかな伴出資料等、基準となるべき類例に乏しい故であるが、それとて消費地での検討の積み重ねによって将来的には解決されるはずである。

ただ、短期的にここで問題となるのは、中野氏のいう9型式以降、即ち15・16世紀の編年である。なぜなら、それが確認されている房総の城館とはほぼダブる時期ながら、一層その年代的根拠に欠くという事情がある。加えて、常滑の場合、一般的にある程度の型式幅をもって出土するケースが結構あり、これは一定の使用期間を物語るのであろう。それ故、現状では、常滑の編年観をもって即城館の年代に結びつけるのは危険と言わざるをえず、瀬戸・美濃を始めとした陶磁器全体のなかで考えるべき問題といえる。その意味では、大甕という他の産地でない容器ゆえに（関東での話だが）、むしろ生活や職業を物語る遺物ともいえる。

②カワラケ他 「カワラケ」とは、文献上で登場する「かわらけ」をさすが、それは厳密に言えば「かわら筍」つまり素焼きの器を意味する。それが関東における明るい土色の素焼きの皿と果たして同一と言えるかだが、「土師質土器」という用語も問題があると考えられる。ここでは、とりあえず器種・用途を同じくするものとして「カワラケ」としておきたい。

さて、このカワラケだが、中世の遺跡では継続して可成り出現頻度が高いことから、近年その研究も活発である。その研究史については、例えば鳴田浩司氏の論文⁽¹⁹⁾を参照されたいが、本県でも他の出土遺物とのすり合わせや形態変遷によって、半世紀単位程の大まかな編年案が提示されてきている。

ただそうはいっても、カワラケは外見上は単なる素焼きの皿で、ロクロないし手捏ね、法量（大小の皿）、口縁部の形態（内傾・外傾）、底部の厚みや形状、回転方向も含めた切り離し技法などによって分類しており、その変遷を追うには旧郡単位ないし更に細かな地域差があって、多分に地域に根ざした経験と観察眼が要求される。ある意味ではどこが違うのか、わかりやすさが求められていよう。

その一方、かわらけそのものは既に指摘されている如く廃棄までのサイクルが短いつまり直ぐ消費される傾向があって、要するに、地域的な編年が確立されれば最も有効な目安となる利点もある。その意味では、型式変化のみならず、量的変化や使用～廃棄へ至るプロセスなど、その属性変化にも目をむける必要があると考える。

この他に、南伊勢系土器、内耳塙、瓦質播鉢などがある。南伊勢系土器が13～15世紀、内耳塙、瓦質播鉢が15世紀以降というように、その流通時期には相違があり、これだけでもある程度の目安にはなろう。しかし、出土量が稀少であったり、分布に地域性があったりする。その意味では研究途上の遺物ともいえ、今後の深化が期待される。

③石塔 一口に石塔といっても多種多様だが、本県の中世遺跡で一般的に出土する石塔といえば、板碑、五輪塔、宝篋印塔であり、まれにその亜型ともいべき石塔がみられる。以下、それらを順を追ってその年代的基準という側面からみていこう。

まず、板碑であるが、これは多く紀年銘が刻まれていることから、まったく問題ないように見える。だが、不思議なことに板碑がその遺跡の年代に寄与した事例はそれほど多くない。何故かといえば、大体板碑は当時の館・屋敷の裏山などに建てられることが普通で、しかも、露出していたり耕作などで、持ち去られたり本来の位置を離れていることが多いからだ。それだけではなく、出土状況からして後世の遺構・遺物のなかに混在してみつかるというケースがむしろ一般的である。

言うまでもなくそれは板碑の建立年代、つまりそれが盛んに建てられたのが鎌倉末期～南北朝期であったことに主因があることはいうまでもない。ところが、ここに一つの問題がある。それは既に統計にも現れている如く、15世紀を半ばする頃からその終末にかけてももう一つのピークがあるということである⁽²⁰⁾。この頃の中世遺跡は最も多く調査されているので、当然その中に板碑が含まれていいわけであるが、現実にはそれほど多いわけではない。

では何故なのかということになるが、私は基本的にそれは板碑の流通、受容に地域差があった故とみる。関東の板碑といえば、何とんでも武蔵板碑であるが、それは他に競争相手のない広大な荒川・鬼怒川、現利根川流域へ広く浸透した結果であり、現実には各地に小規模な独自の生産・供給体制もあった（群馬県の小幡型板碑、東京都の伊奈石板碑、本県で言えば、香取、海匠、印旛の一部に及ぶ下総板碑など）。

更に細かくみてみよう。本県では武蔵、下総両板碑に集約された感があるが、それは市原北部・千葉・山武郡北部を結ぶ線から以北のことであって、実には上総、安房の大半はその圏外にあったのである。この圏内にしても、両者の混交地域あり、飯岡石の分布地域（香取南部・匝瑳・山武⁽²¹⁾）ありと一様ではないが、本県南部が長い間全く空白のように扱われてきたことがやはり一番の問題である。

その意味で、早川氏によって報告された清澄山の石塔（蛇紋岩製）は一つの答えとなるものであった⁽²²⁾。即ちそれは異論もあろうが、板碑として捉えてよいと考える。大多喜町で出土した題目板碑⁽²³⁾もかつてはその系譜が不明であったが、この流れのなかで生まれた型式とみるべきであろう。

ところで、鴨川市内にはかつて川戸 彰氏によって「南房総型板碑」として紹介された⁽²⁴⁾ 特異な一群の石塔がある。これを板碑とすることももちろん異論があろう。だが、では何かとなれば、現状では板碑の退化型の一つ「墓標化」として理解しておくべきかとみている。というのは、現在のところ、紀年銘で見限り「南房総型板碑」は16世紀以降の遺品で占められているからである。

その分布は鴨川市内及び安房の一部に限られていたが、近年勝浦市内でも確認されたので、夷隅～安房東部に広がるものであろう。恐らくその分布圏は前代の清澄山や大多喜例も同様で、その始源は不明ながら、南北朝期以降は蛇紋岩製の石塔圏というべきものがあつたとみる。ただ、その製品としての絶対数は少なく、安房・上総西部つまり東京湾岸では僅かに認められる武蔵板碑が搬入されたのであろう。つまり、房総南部では板碑を建てるという行為自体が一部の人々にのみ用いられた、と捉えておきたい。

さて、前置きが長くなったが、要するに東葛・印旛・内房沿岸北部では武蔵板碑が、香取・海匠では下総板碑が流通したのに対し、夷隅・安房東部では独自の板碑文化があつた。そして、内房沿岸南部・安房西部では僅かに武蔵板碑が搬入・流通した地域であつた、ということになる。ただ、年代との関係でみると、中世を通じて同一ではなく、前二者が曲がりなりにも（単純に絶対数の減少というより小型化・簡素化、多く紀年銘も省かれる）その末期まで残存するのに対し、後者はむしろ一部（鴨川）を除けば15世紀以降、空白地帯に近い状態となる。これを石塔文化の稀薄地域とみるのはもちろん正しくなく、そこには、板碑に替わる新しい動きがあつた見たほうがよい。五輪塔・宝篋印塔がそれである。

五輪塔と宝篋印塔はもちろん同一ではない。初期には宗派や法系また造立階層等によって違いもあつたようだが、15世紀以降は意識として大きな差があつたとも思われない。両者の地域的な分布については特別な先行研究もないが、概ね次のような傾向が看取できる。

即ち、その産地別にみると安山岩製の一群、砂岩製の一群、蛇紋岩製の一群に大別され、まれに、凝灰岩製、泥岩製の一群が見られる。もちろん、量的にもエリア的にも中心をなすのは、安山岩製と砂岩製で

あり、それぞれ伊豆石と銚子石に比定されよう。伊豆石については、下総の一部を除きほぼ全県下に及んでいる。ただ、注意せねばならないのは、東葛地域であり、そこには群馬産の安山岩製石塔が入り込んでいる。これも石質などよくみればわかるのだが系統が異なるという点は認識しておく必要がある。

この伊豆石石塔は法量的に当然大小があるのだが、それも大型のものは鎌倉～南北朝期に多く、以後は亡いわけではないが高さ二尺～三尺の規格的な製品で占められる。この手が普通、城館と共伴するのである。ただ、困るのは小型石塔の例にもれず紀年銘のないことで、とりわけ16世紀代の製品はほぼないといっている。

そこで、形態から判断するわけだが、まず五輪塔の場合、最もよく年代を示すものは空・風輪部である。本来、空と風は別の意識があって、形態にもそれが反映されていたのだが、15世紀頃には風部の比重が増し、また、空部は正面円形ではなく、風部に対応した長方形に近い形となる。つまり、空・風間の溝化が始まるのである。これが、16世紀では、空部と風部の比重が逆転し、間の溝は決定的となる。

同じく15世紀代の火輪は空・風部に較べて小型となるためか、軒端が切れた感じとなり、四隅の反りもほとんど見られなくなる。16世紀代ではそれが一層顕著となり、しまいには屋根の勾配はなく押しつぶされた形態となる。一方、水輪は顕著な特徴を指摘しえないが、何れにせよ球の上下をカットした形で、しかも多少上膨らみのものが15世紀代に残存するようである。

この点、地輪も除々に横長から方形への流れを辿る（中世段階では例外も多く、産地別の傾向もある）という以外にないのだが、ここに願文・年号が刻まれるという点で、一層紀年銘資料の集成が望まれる。なお、各部には種子のキャ、カ、ラ、バ、アが刻まれるとされるが、現実にはそれも15世紀頃までで16世紀には小型の場合普通は何もない。逆に要注意なのは、題目（南無妙法蓮華経）や名号（南無阿弥陀仏）を刻むなど宗派性を示す例であり、それによって法華や密教系はむろん浄土宗や時宗などの教線のあり方を知ることができる。例えば、現在の寺の前身が中世に遡るという場合は多いが、同じ宗派という前提はまず捨ててかかったほうがよく、文献との対比ないしはその欠を補うという意味でも重要な視点なのである。

次に、宝篋印塔では、相輪部が多少寸詰まりとなり、宝珠は五輪塔の空部と同様の傾向を示し、請花は簡略化されむしろ彫り込まれる形状となる。また、笠部は上下の階段共に圧縮されて隅飾も四隅に近く立つようになる。塔身は五輪塔と同様ながら、こちらは16世紀代まで四面に種子の金剛界四仏をけっこう刻んでいる。この下に、基礎部が付くわけだが、ここに銘文が刻まれる。しかし、五輪塔の地輪と同様、方形化の傾向は同様ながら、これだけでは難しい一面もある。

普通はここまでだが、本来は更に反花座があり、上部は一辺4弁の反花、下部は中間の束のみで間には格狭間もない。ただ、発掘例でも出土例が少ないことを考えると次第に伴わなくなるのであろうか。

なお、既に述べたところでおわりの通り本県ではいわゆる関東形式の宝篋印塔であるが、例外もあって、清澄寺一帯には関西形式の一群がある。これが清澄のみの特殊例とみるのは恐らく正しくなく、蛇紋岩製という点から、本来は板碑と同様、夷隅から安房東部にある程度の分布圏があったのだろう。

次にいわゆる下総型宝篋印塔であるが、その最も大きな特徴（他と異なる点といってもよいが）は笠部の下階段がないか塔身部と結合し、かつ、正面が長方形を呈すること、である。また、反花座がないこと（初期の内からないかどうかは不明）もそうであろう。加えて、相輪が長大・寸詰まりという点も同様である。総じて全体に無骨な作りという評価もあるが軟質砂岩という事情も強く働いたはずである。

ところで、では五輪塔は作られなかったといえそうではなく、銚子石製の五輪塔は宝篋印塔と同程度に認められる。それがなぜ下総型五輪塔とよばれなかったかといえ、大きな相違がなかったからである。だが、これは全くなかったかといえそうでもなく、大きな空・風部、軒が下部に傾斜する火輪部、多少逆台形を呈する地輪部、といった具合である。だから、その意味では下総型石塔ないし銚子石石塔と呼ぶべきだが、それはさておき問題はその編年観である。

というのは、従来この手の石塔は16世紀以降の紀年銘資料しかなく、その変遷については多分に推測によるものであった。しかし、多古町東漸寺や小見川町来迎寺例は明らかに古い一群であり⁽²⁵⁾、前者の場合大型の宝篋印塔群としては現在唯一の例であろう。形式的に15世紀の前半代の様相を示している。大栄町大慈恩寺例⁽²⁶⁾は幅を有するが、14世紀後半から16世紀代というところであろうか。共に下総では古い歴史を有しており、恐らくその檀越（千葉氏、東氏一族、大須賀氏）や住持を対象として受容されたのであろう。ただ量的には僅かで、広く出回るのは16世紀代それも後半で、しかも天正年間として間違いはない。銚子市円福寺例⁽²⁷⁾はそのはしり（16世紀前半～）で、佐倉市海隣寺例⁽²⁸⁾、八日市場市西光寺例⁽²⁹⁾、佐原市観福寺等例⁽³⁰⁾など皆この時期に造立されている。また、その造立範囲も北は茨城県の北浦一帯から稲敷郡、西は佐倉・印西、南は大網白里まで及んでいる。そして、近世の元禄・享保あたりまで残存するが、むしろ造立の中心は近世初頭にあつて、この点が伊豆石石塔と大きく異なるのである。

蛇紋岩製の石塔については既に述べたので繰り返さないが、近年、いわゆる南房総型板碑と五輪塔が一緒に出土した例（鴨川市花輪遺跡・註31）がある。南房総型板碑4基、五輪塔4基であり、石塔そのものは近世に集められたものながら、天文、弘治、天正の紀年銘資料と五輪塔群と一緒にあつたという事実は、16世紀代のあり方を予想させるものがある。

この他に、従来等閑視されてきた石塔に、鋸山産の凝灰質礫岩や恐らく房州産の砂岩製石塔がある。前者は君津市・富津市～安房北部にかけて分布し、南北朝期頃から散見されるという特色をもつ。一方、後者は安房（西部）に分布する。何れも、数的には少なく、形態変化は追えるものの編年的研究にはほど遠い現状である。

さて、このように言うと、小型の石塔も年代決定の根拠として充分使えるのではという気にもなるが、一揃いかつ単独で出土する場合はまずないから、パーツの山を前にして悩むこととなる。それゆえか、報告書を瞥見する限り板碑はともかく、多くは最後に付け足的にふれ、総てを図化するケースも少ないように感じられる。だが、逆に15、16世紀という現存城館と並行する時期に盛行する点から、これからは陶磁器のみの年代をチェックする役割を果たす機会が増えることと思われる。

一つの例を挙げよう。光町篠本城跡は一つの城を全掘ししかも斜面も含めししたケースとして特筆され、出土した陶磁器から15世紀代の城として報告され⁽³²⁾、また、諸所に引用されている。だが、出土した多量の石塔—五輪塔約40個体（最も多い火輪から）、宝篋印塔4個体—は一部を除きほぼ天正期頃と推測され、これが堀底から浮いた状態で出土している。しかも注目されるのは、他に一石の宝篋印塔も2点あり、これは伊豆石の場合、16世紀も後半になって現れる。としたらこれはどう整理できるであろうか。筆者は以前からその構造、とりわけ堀のあり方や縁辺の処理の仕方など、それはどう見ても16世紀代の所産と見ていただけに、天正期も含めたそれ以前に最終年代がおかれるべきであると考えている。

参考までの話だが、大慈恩寺の発掘調査で出土した石塔の年代をこの篠本の「年代」から15世紀の所産と位置付けている⁽³³⁾。だが、それは本末転倒で、当然、紀年銘資料との整合性はない。香取・海匝地方

の場合、こんな活用例が更にふえるであろう。それは、中世～近世にわたって継続的に供給されているという意味で、房総では唯一の産地である故である。

④**銭貨** 銭は中世の遺跡では必ずといってよいほどに出土する。だがその割にそれをどう活用するか、というよりそんな意識さえみえないのが現状である。これは日本の場合、総て一文銭として通用したので、銭種の構成から所有者・使用者の性格に立ちゆかないという一面もあろう。しかし、いわゆる埋蔵銭の集積作業や遺跡での出土例の蓄積から活用への道筋が見えつつある段階にきていると思う。

その一つが、銭種の構成や稀少銭種の有無などから年代を割り出す方法である。この点については、既に先行研究があり、一括埋蔵銭のあり方から8期に及ぶ変遷が示されている⁽³⁴⁾。その基本線は唐・宋銭以後に加わる銭種の有無を鍵に、末期は永楽、洪武など明銭の割合も考慮するというものである。

ただ、誤解するむきがあるかと思うので、一寸ふれておくと、この期というのは陶磁器や石塔のような型式変遷ではなく、それはあくまでも主に元朝以前、不定期に鑄造される銭種の有無であるから、各期の互いの年代はまったく一定せず、しかも、何年以降というような一つまり、初鑄年〇〇年の銭が入っているから〇〇年以降一性格のものであるということである。ただ、このような欠点、むしろ限界を熟知すればそれなりに応用はきく。その一つが埋蔵銭ではなく普通の中世遺跡での出土例であると考え。

筆者は近年、県内の大量出土銭を集成した⁽³⁵⁾。そこでのあり方は時期的に偏りはあるものの、やはり全国的な傾向とほぼ同様で、かつて鈴木公雄氏が指摘した如く、「中世の備蓄銭を構成する基本銭種は、中世の各時期を通じて均質」⁽³⁶⁾であるのに対し、遅れて加わった永楽、洪武の両明銭はある時期以降その割合が急増し、とりわけ前者は東日本において著しい、という結論を地でいくものであった。それとともに、県内各城館（遺跡）での出土例を検討するにつれ、一見同調しえないかに思われる銭種構成に結構類似するものがある点に気付いた。以下、その対応関係を整理してみよう。

大量出土銭の画期は詳しくは先行研究によらねたいが、本県でのあり方を検討すると、①明銭を含めぬ段階（14世紀代）、②明銭を含むも未だ主要な宋銭に及ばない段階（15世紀前半代）、③明銭（永楽通寶、洪武通寶）が主要な宋銭と拮抗し、朝鮮通寶や世高通寶など15世紀初鑄の稀少銭を含む段階（15世紀後半～16世紀）、④明銭が20%前後かそれ以上に達し、永楽が洪武を圧倒する段階（16世紀前半～中頃）、⑤前代の傾向が更に顕著となり、16世紀初鑄の稀少銭種が加わる段階（16世紀後半～近世初頭）、の6段階に要約できるかもしれない。もちろん、これも一種の概念的な変遷で、実際は大まかな流れというのが正しい。

では実際の城館（遺跡）出土例をみてみよう。14～15世紀の場合、良く知られている長南町岩川、鋸南町下ノ坊をはじめ、概して銭貨の出土点数は少なく、これは傾向としてあげられよう。しかし例えば、ほぼ14世紀代に相当する千葉市有吉北貝塚（中世遺構群）では、出土した19点の銭貨は宋銭で占められていた⁽³⁷⁾。次いで、15世紀中頃辺りで終焉を迎えるとされる「集落跡」の茂原市神田山第Ⅲ遺跡でも、出土した14点に明銭が含まれない⁽³⁸⁾。成田市駒井野荒追遺跡⁽³⁹⁾や大栄町長久保・内野遺跡⁽⁴⁰⁾などは更に下る遺構もある例で、前者は0/13、後者は3/35という割合である⁽⁴¹⁾。しかし、後者の場合この明銭3が総て1基の墓坑から出土しており（3/12）、それを除けば残り23点に明銭は含まれない。

これに対して、千葉市後台城跡は15世紀中頃～後半の比較的短期間に営まれた城跡と報告されている例で、ここでは3/17の割合（洪武2、永楽1）で明銭が出土している⁽⁴²⁾。

一方、大窯期の瀬戸・美濃製品を含む場合は、明らかに明銭、それもある程度の割合をもって伴ってく

る。その中でも、だいたい大窯のⅠ段階程度で止まっている場合と、Ⅱ以降を含む場合とでは差があるようで、前者は真里谷城（9/34）⁽⁴³⁾、笹子城（45/183）⁽⁴⁴⁾、根木内城（10/47）⁽⁴⁵⁾、後者は、本佐倉城（15/27）⁽⁴⁶⁾、長勝寺脇館（7/9）⁽⁴⁷⁾、馬洗城（10/42）⁽⁴⁸⁾、和良比城跡（4/12）⁽⁴⁹⁾、大崎城跡（19/59）⁽⁵⁰⁾などがあげられるが、後者の場合、明銭のなかでも永楽の比率が高まる傾向がある（洪武、宣徳に対し2～4倍）。城郭ではないが、墓跡が中心で、しかも近世へ継続するような場合では、我孫子市鹿島前遺跡に代表されるように銭貨を大量に出土する例がある。いずれも永楽の比率が高いものである⁽⁵¹⁾。

もちろん、遺跡の年代幅は一様でなく、また、調査面積や調査精度（銭貨の大きさからして）、更には一部の遺構に集中するような場合などによっても当然異なる。大きな遺跡で、幅があればその内容も数段階を含むものとなろう。篠本城（37/207）や生実城（99/466）⁽⁵²⁾などはその例だが、前者の場合、14～16世紀にわたる年代幅（篠本の場合、遺跡と城郭の年代観は異なる）が明銭の割合を低くしたとも捉えられようか。また、発掘資料ではないが、小金城馬屋敷（87/788）・同家老屋敷（162/802）のような一括大量出土例もある。後者は永楽が洪武の3倍を占めているなど、明らかに後出する様相である⁽⁵³⁾。

ところで、銭という径2cm一寸の遺物の場合、調査の精粗また城館や集落、墓域といった性格の差による絶対数の違いはむろんあろう。だが、陶磁器と同様、同じ条件で比較すれば一定の傾向は出るはずで、それは、大量出土銭と城館（遺跡）出土銭がかなり対応することでもわかつた。

最後に、稀少銭種の問題であるが、これは大量出土銭で明らかなように、ある程度の絶対数を必要とする。本県の場合で言えば、比較的出土数の多い朝鮮通寶（初鑄1423）でも数百点に1点程度、大世通寶（初鑄1454）や世高通寶（初鑄1461）更には延寧通寶（初鑄1454）や洪徳通寶（初鑄1470）になると、1000点に1ないし2点といった具合であるが、これらは確実にその下限を示唆してくれる⁽⁵⁴⁾。当然、一般の遺跡でも同様で、それゆえ、数百点以上の出土数の場合、その有無は大きな意味をもってくる。なお、近世の寛永通寶などは表土を完全に除去したような場合を除き、ある程度の混入がみられる。後世に宋銭が混入するというケースも考えられるが、その比率を変えるには至らないと考えている。

⑤鉄砲玉 鉄砲玉とはもちろん火縄銃の銃弾のことで、当時は「鉄砲」及び「玉薬」として登場し、この玉薬の玉が弾、薬が火薬に相当する。セットとして用いられたためである。

さて、この鉄砲であるが、一般的には天文12年（1543）、ポルトガル船の種子島漂着に始まるとされる。しかし、それがポルトガル船かどうかはともかく、それ以前に既に伝来していたという説もあって、実際は一つの区切りにすぎないというべきかもしれない。それはともかく、天文末～永禄期に至るや西国で結構普及したとみえ、諸所に記述が垣間見える。

一方の東国であるが、例えば北条氏関係の文書で、永禄4年（1561）に比定されている北条宗哲（幻庵）書状⁽⁵⁵⁾には、武田軍がたとえへ押し寄せてきても、当城は「鉄砲五百丁籠」めておいたこと故、堀端には近づけないはずだ、と豪語している。この五百丁とはもちろん誇張であろうが、武器としての威力と使用法が窺えて面白い。この文書は鉄砲関係としてははしりのもので、房総では永禄12年（1568）頃に比定されている北条氏康書状⁽⁵⁶⁾に、「鉄砲玉薬」とみえるのが最初である。これは、里見氏が市川・葛西筋を窺う挙に出たのに対し、北条氏が遠山氏他に対抗するように命じたもので、そのときに鉄砲・玉薬を手配したのである。

では、実際のところどの程度の鉄砲があったのかというと、元亀3年（1572）時に武蔵岩槻衆の一人、

宮城氏（知行貫高約280貫）の着到状には馬上8騎を筆頭に、鎧兵17人以下36人の内に、「二挺 歩鉄砲侍」とある⁽⁵⁷⁾。馬上500騎とすれば100挺以上となるが、これはあくまでも計算上の話である。ただ、一応の目安になろうか。房総では、天正15年（1587）の井田氏の着到状⁽⁵⁸⁾に、計33挺を数え、これは馬上59人、鎧兵他300人に対しての数である。つまり、永禄末期以降、鉄砲は急速に普及したことが窺われる。

事実、天正2年の関宿城攻略戦に当たっては、北条氏照軍は対岸の山王山砦から城中へ鉄砲を撃ち込み、対する築田軍は孤立したこともあろうが、玉薬に事欠き、遂に撤退している。鉄砲の威力を物語る事例である⁽⁵⁹⁾。

さて、前置きが長くなったが、以上要するに鉄砲玉（ないし鉄砲本体あるいは鉛付着のカワラケなども可能性としてはある）の出土は、下限を永禄期以降に置く根拠になるということである。とりわけ1、2点ならともかく、多く出土するような場合は実際の戦闘を想定することも可能で、その一つの例が一宮城であろう。

一宮町一宮城では、庭園を伴う主殿の一面が発掘調査されているが、多くの貿易陶磁器、国産陶器、金属製品に交じって鉄砲玉が14点出土している⁽⁶⁰⁾。その背景として、火災に遭った土中にパックされていたことと、永禄～天正にかけて激しい争奪・戦闘の舞台となったことが挙げられよう。注目すべきは、その内容で、二匁玉（6点）、三匁玉（5点）、四匁玉（1点）、七匁玉（1点）と（残りの1点は不明）、結構バラエティに富んでいることである（この点、4点出土した松戸市小金城の例もしかり⁽⁶¹⁾）。これは、二、三匁筒が一般的ながらそれより大きな鉄砲もあった訳で、これが使い分けによるかどうかは更なる類例の検討が必要となる。

房総では、前記2城の他に、関宿城三の丸跡で115点と最も多量の出土例がある⁽⁶²⁾。もちろん、近世城郭としても機能したことを思えば問題もあるのだが、ここでは近世の遺物が出土していないので、中世の所産の可能性はある。既述した関宿合戦を物語る遺産かもしれない。それはさておき、土気城、長南城など房総を代表する主要城郭で、且つ、天正年間まで存続する城では通例出土（本佐倉城では鉄砲の機関部）していることから、次ぎに位する城郭ないし臨時的な城でも出土していればそれは年代決定上有効な指標となろう。夷隅町大野城⁽⁶³⁾、芝山町田向城などはこの例で、とりわけ後者の場合、土塁中から出土した点で特筆される。つまりそれは16世紀も後半になって築城された城なのである。

ただ、これも銭貨と同様径僅か1cm程度の遺物であり、調査精度の問題が付いてまわる。小櫃川の河川敷に近い菅生遺跡では水田中よりまとまって出土しているが⁽⁶⁴⁾、これも水田面を鋤簾で土を薄く剥がしていった結果というべきであろうか。とすれば、文献や構造で16世紀代に比定できる城では、あらかじめその出土も考慮して調査方法を考えるべきであろう。

3. 前節から導かれた房総城館の流れ

土塁と堀＝城郭なのかといえ、必ずしもそうではない。しかしそれも時代による、といったらとまどう人も多いただろう。実は城とは何か、という基本的な部分が案外理解されていない。少なくとも15世紀の前半までは城と館は別物である。つまり、戦時に当たって堀を掘り土塁を巡らし、あるいは、櫓をあげ館の周囲に鹿垣を結ったりするのが、城郭を構えることであり、普段の屋敷は土塁や堀があってもそれはあ

くまでも館なのである。

ところが、支配体制（幕府・鎌倉府一守護）が徐々に機能不全に陥るや、日常的な戦時が生まれるわけで、そこに恒常的な城郭成立の契機があると考えられる。こう言うと、それが前節の結果とどう関係するのだろうかと思うであろう。実は、既に指摘されている如く、房総の城館は15世紀中頃を境に断絶があるのである。

具体的に言うと、房総でそれ以前ないしその前後に位するとされる「城館」一、下ノ坊館跡、岩川館跡一などは、低地に立地し、堀も浅く土塁も明瞭でない⁽⁶⁵⁾。この土塁については（中世では用語的には「土居」であるが）、どういうわけか堀に比しても明らかに貧弱で、これはむしろ土塁そのものというより絵巻物でみるようにその上に生垣や垣根ないし土壁の基礎程度のものであったと推測するが、これについては更なる検討課題であろう。とはいえ、15世紀代で終焉を迎える館跡一しかも発掘調査で検出された一の共通性が浮かび上がってきたことの意義は大きく、しかもそれが如上の如く、文献上の内容とも一致ないし近似する点においても、である。

ところが、ここに従来から16世紀代には廃絶したと言われている二三の「城館」がある。また、近年の動向では、このような見通しを一部修正ないし打ち消すような意見がある。それも遺構・遺物の再検討から導かれた結果である。

山武町埴谷周路館跡は台地縁に立地する略五角形（長径約50m）の形態で、高さ2mを越える土塁と箱堀が一周する。報告書では陶磁器の年代を云々するのみで、館跡の年代までには至っていないが、実測図を見る限り確かに大窯製品はみられない⁽⁶⁶⁾。また、四街道市池ノ尻館跡はほぼ方形（径約40m）で、同様に高い土塁を有しながらも、堀はその割には浅くまた高低がある。そして、土塁自体の幅が広く、塁線がうねっていることなど他と異なった点がある。ここも、実測図では大窯製品が主流を占める⁽⁶⁷⁾。

ところが、両館跡とも土塁下に入る遺構があつて、少なくとも館跡以前の年代を考慮する必要性が生じる。土塁のあり方にしても、埴谷周路の場合、山武町内のみならず近隣のこの種館跡（台地上でかつ単郭）と差異なく、それゆえ他もすべて15世紀代と言えらるだろうか。そうでないとしたら、一世紀以上大きな変化がなかったというべきであろう。池ノ尻の場合、最近類似資料（千葉市南屋敷遺跡）が調査されたことでより明確になったといえる。即ち、そこでは周囲に明瞭な堀がなく、存続期間は「15世紀の半ば頃から16世紀の半ばあたり」とする。また、その性格も「屋敷跡」と見るのが至当で、かつ、一般の城郭遺構とは異なるとした⁽⁶⁸⁾。実は、池ノ尻については一部に言われているように古い遺物のみではなく、大窯製品も入っており、土塁に伴う遺構は南屋敷とそれほどの年代差があるとも思えない。

このように、両館跡とも更なる検討なしには安易に15世紀代の館跡と位置付けるわけにはいかないと考える。むしろ、一方は16世紀代の館跡、一方は同じく16世紀代の所産ながらもそれとは異なった施設として理解しておくべきではなかろうか。

そうすると、台地・丘陵上に立地し、土塁や堀・堀切を備えたオーソドックスな館・城郭はいつ頃出現したのだろうか。実はこのあたりが最も肝心なところで、従来の調査例からすれば、それは古瀬戸後期Ⅳ期それも新段階といってよい。このⅣ期新の年代は藤沢氏によれば15世紀の終末を遡るが、それも文献との整合性から求めたもので、そのまま定点とすべきではない。だが、それは房総の恒常的な城館出現と矛盾しない。一例をあげよう。

上総武田氏は16世代にいわば上総の「国主」として君臨したが、その基礎をつくった人物として武田信

長の名があげられる。彼は本拠であった甲斐から15世紀の中頃には房総に足掛かりを得たと思われ、それが系譜として繋がるかどうかははっきりしないものの、以後武田氏は上総の覇権を握ることとなる。肝心なのは、信長自身は終生あくまでも「武田」であったが、その後子孫の一系統は真里谷を名乗ったことである。その初見は、文明16年（1484）のことで、ここでははっきりと「真里谷」とみえる。

この真里谷とは小櫃川中流の要地真里の東側谷奥に位置する武田川流域に開けた谷間を指し、その最奥に真里谷城がある。ここは上総武田氏の一方の旗手ともいうべき真里谷武田氏の本拠とされた城である。武田氏が当初から真里谷に居たとはいえにくく、もちろんある時期以降の所産であろう。そうだとすれば、真里谷の名乗りがいつまで遡るか、それがひいては真里谷に城を構えた年代と符号するのであろう。それゆえ、現状では文明年間（1469～）以後のこととしてよいであろうか。その呼称としてはやはり真里谷「要害」ということになろう。

では、出土遺物はどうかというと、瀬戸・美濃産陶磁は古瀬戸後期Ⅳ期（新）～大窯第1段階、常滑が10、11型式、貿易陶磁が染付+白磁皿の段階で、何れも15世紀後半それもその終末～16世紀前半として問題ない内容である⁽⁶⁹⁾。ただ、同じ一族の拠った笹子城もそうであるが、その終末については曖昧なままとってよい。これについては、瀬戸・美濃でいう大窯2段階が問題になってこよう。真里谷武田氏は天文21年（1552）以前に当主信応が没し、そこには北条氏の支配が及んだので、真里谷城はその時点で廃城に至ったと考える。一方、笹子城も「ささこおちのさうし」・「なかをおちのさうし」に拠れば、天文12年（1543）に落城する。南側の高丘に築かれた城郭が伝承通り正木氏のものだとすれば、武田氏の拠った笹子城も同様その時点で廃城になった可能性が高い。

確かに、笹子城では破片まで時期区分した結果、大窯2～3段階の遺物も少量ながら交じっているようであるが⁽⁷⁰⁾、圧倒的にそれ以前が多いことを考えると、やはり第1段階終末の年代幅をこの天文初期辺りくらいまで下げて考えてよいのかもしれない。また、そうすることで房総城館の推移もスムーズに理解できるのではなかろうか。そして、陶磁器以外、例えば石塔の出土も多いが、安山岩製の中・小型の五輪塔・宝篋印塔で占められる姿（形式的には15世紀～16世紀）や1点の搬入品（いわゆる鎌倉石製か）が交じっていることなど、西上総の概期の状況と矛盾しない。

また、両者共に銭貨は明銭が20数%を占めながらも（45/183・9/38）、洪武通寶が結構含まれている点など符号するところがある。加えて、鉄砲玉の出土もない。もし、これらの何かが違っていればそれは再検討を要するであろう。

ところで、笹子城はその最終段階に堀の頻繁な改修—しかも大規模な—を行っている。これは真里谷城を凌ぐもので（現存遺構との比較ではあるが）、恐らくこの頃に防御遺構の強化が計られ、しかもそれは個別笹子のみではないとみる。この笹子も発掘調査前に筆者が訪れた頃は丁度堀跡の辺りが一段高くなっていた。つまりそれは、廃城に当たって堀を埋めわざわざその上に土盛りをしたわけで、これなどはある意味で永遠にこの城を封じ込めようとした意図さえ窺える。それは同時に深い堀の存在が城郭を巡る戦闘で大きな意味をなした故であろう。

これは見方を変えれば曲輪の要害性を高めているわけで、一見技巧性に乏しいとされる上総南部～安房の城郭もその意味で再評価が必要である。即ち、従来これらの地域では丘陵を削平しただけの単純な城郭との一般的な認識があった。しかし、その立地は周囲を河川が巡る高い丘陵上にあるなど、本来の要害地を活用している例がほとんどである。そして、詳細に観察するとこれらの城郭にも一連の発達過程が窺わ

れる。

即ち、要害をなす丘陵の尾根上を削平したもの→堀切により前後を画するもの→曲輪の周囲を削り落とし腰曲輪状の平場、ないし周囲を堀切、空堀で遮断するもの、といった具合で、城の性格ないし築城者の勢力如何により単郭、複郭ないし多郭になろう。しかし、これは現存する遺構の比較から求めた流れで、現状では発掘調査例は決して多くなく、しかも戦国末期（金谷城、久留里城、岡本城、稲村城など）に偏っており、金谷城を除けば部分的な調査にすぎない。その意味では試案に過ぎないが、その基本的な発展過程、—しかも上総北部～下総と比較して—に齟齬はないとみる。

この16世紀中頃の天文～永録期は、築城のノウハウが実戦を通して最も蓄積された頃で、それゆえに経略過程で多くの城郭（要害、向城、境目城等）が築かれた。それも城郭を廻って戦闘が行われた故である。

では最終的な姿は何か。これは文献との対比でより鮮明となる。下総では関宿、小金、臼井、本佐倉、森山城、生実城、鎗木城など、上総・安房では椎津・久保田城、長南・池和田・勝見城、土気・東金・本納城、鶴ヶ城、万木城、一宮、久留里・佐貫・勝浦・百首・岡本など、文書・記録と城跡が明確に対比しうる例から明らかとなる。

この内、面的な発掘調査が行われたのは関宿、小金、臼井、本佐倉、生実、土気、本納、一宮、万木、久留里などだが、様々な経緯や条件から概期の実態を余すことなく伝える調査例はない。それでも、本佐倉、生実では外城に及ぶ広い外郭部のみならず、更にその外の城下を画する土塁や堀が検出されている。即ち、生実ではいわゆる堀内障壁を有する大規模な堀が城下東限の木戸周辺を巡り⁽⁷¹⁾、本佐倉でも同じく堀内障壁を有する堀が城下東南の木戸の並びに延びている⁽⁷²⁾。臼井の場合は今ひとつはっきりしないが、おそらく準ずるものであったろう。これを、惣構と呼んでよいかどうかだが、関東では北条氏の場合、「大構」という表現である（小田原城、岩槻城）。房総ではこの大構の記載さえないが、戦国期の下総を代表する千葉、原氏の居城である本佐倉、生実・臼井で認められるとすれば、それに準ずる小金、土気・東金辺りでも可能性としてはある（要は程度の差）。

この問題で、対照的に引き合いに出されるのは上総南部・安房の事例である。これも今後の課題というべきだろうが、長南、万木ではその可能性があるし、岡本などもそのような視点で検討することも必要と考える。なお、長南武田氏の居城長南城とその東方拠点である勝見城、土岐氏の居城万木城、勝浦正木氏の居城勝浦城では、外郭部を谷もろとも延々と丘陵片側法面整形+堀ないし平場で大きく囲んでいる⁽⁷³⁾。この谷間は厳密には城下とはいえないが、生実や本佐倉と同じ思想の産物といってよい。

では、出土遺物はどう対応するのだろうか。瀬戸・美濃産陶磁器において、大窯の2、3段階が多いかといえばそうでもなく、やはり大窯の1段階までが主流を占める。これをどう考えるかだが、一つは流通量そのものが少なかったという考えがあろうし、また一つには流通期間が短かったという想定もあろう。ではあるが、大栄町馬洗城⁽⁷⁴⁾、同久井崎城⁽⁷⁵⁾、佐倉市長勝寺脇館⁽⁷⁶⁾など、2、3段階の製品が明らかに一定度含まれており（丸皿、いわゆる襷皿・折縁削皿、播鉢、天目）、しかも志野製品や鉄絵皿など藤沢氏の編年観からすれば近世の製品も入っている。そこでは編年の問題もあろうが、関ヶ原前までの徳川家臣団の存在など柔軟に可能性を探っていく必要があるとみている。

なお、関宿、小金、本佐倉（向根古屋）、土気、一宮では鉄砲玉ないし火縄銃の金具が出土している。こういう遺物が末期の主要城郭のみで出土するというのは、やはりその普及の限界を示しているのかもしれない。

最後に、館の発展段階にふれておく。先に館と城は別とした。では15世紀中頃以降、それはどのような推移を辿ったのであろうか。実は下総では土塁、堀をまわした単郭の「城郭」が結構存在する。そして、それが往々高い土塁と発達した虎口構造を備えていることに気付く（佐倉市小竹城や山武町椎崎城、埴谷城、他に四街道市域の例など）。従来これらは、著名な城の陰に隠れていた面があったが、その構造から16世紀の産物であることは確かで、既に挙げた長勝寺脇館跡などもその一例としてよい。

このような遺構に対して、一方では館、一方では城という。またあるいは、城郭構えの館という意味で、「館城」とする場合もある。ただこれは館が城郭化し、しかも発展した姿を示していると捉えたほうが適切である。というのは、丘陵や台地の先端を活用した小規模な城郭の多くも同時期・同地域に併存するからで、単に形態や占地では区別しえないからである。

確かに城郭には戦時に一時的に築かれたりする例も多いが、下総では戦国末期まで小規模な城郭が普遍的に存在する。それらは在地の独立小領主の館城と捉えられるが、ある意味で、千葉氏の族的発展の産物ともいえよう。その一方、鎌倉期以降、いわばよそ者の支配に甘んじ、戦国期に至っては武田氏、次いで里見氏（正木氏）の領国と化した上総では、このような城郭は不明瞭なままである。今後はこのような視点も併せ、トータルな城郭像の構築が必要ではなかろうか。

4. 終わりに

本稿の契機はもちろん城郭にたいする筆者の関心にあるが、近年の研究動向に接するにつけ、危惧するところもあって、それゆえ筆者なりの一つの提言に至ったとあってよい。しかし、これは研究上避けられない道程といってもよく、その大きな要因が資料の膨大な蓄積にあるのは言うまでもないであろう。

つまり、かつては現存する遺構と文献を照合し、一つの仮説を提示するのみで済んだのが、膨大な数の縄張図とこれまた数多くの発掘事例と、地域的な中世史の研究実績を相手にしなければならなくなったからである。その意味で、何が基本となるか、それはやはり時間軸の検討であろうと考える。もちろん、筆者がここで行った作業の有効性も当然俎上にのるわけで、そういう議論のなかから新しい展開があると信じている。

そのためにも、分野を越えた提携がより一層望まれ、また研究者自身も従来の見解にとらわれることなく、かつ修正を繰り返してより実態に近づく努力が求められていよう。本稿はその意味で研究上の通過点にすぎない。

註

- (1) ①千葉城郭研究会 1989『千葉城郭研究』第1号
②市村高男 1996「房総における中世城館跡の地域的、年代的分布とその特質」『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ—旧上総国・安房国地域—』千葉県教育委員会
③井上哲朗ほか 2000『千葉県文化財センター研究紀要』20号 財団法人千葉県文化財センター
- (2) 千葉県 1919『千葉縣誌』巻下
- (3) 『印旛郡誌』、『長生郡郷土誌』を嚆矢とする、郡教育会編纂による郡誌である。

- (4) 「千葉上総系図」, 「里見系図」など。
- (5) 改訂『房総叢書』第五輯系図部には「上総武田氏系図」, 「里見系図」, 「正木家譜」などが収められている。
- (6) 岡田見司『さとみ物語』参照のこと。
- (7) 中野修秀 1994『田向城跡』財団法人山武郡市文化財センター
- (8) 戸倉茂行 1984『真里谷城跡』木更津市教育委員会
- (9) ①田口成利ほか 1984『一宮城跡城之内遺跡発掘調査報告書』一宮町教育委員会
②小高春雄ほか 2004『中世の一宮』一宮町教育委員会
- (10) 小野分類1982によるが, その後, 小野案をもとに補強・修正などの作業が行われている。
なお, 従来呉須手と呼ばれていた漳州窯製品の存在もその一つである。
小野正敏 1982「15~16世紀の染付碗, 皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
- (11) ①藤沢良祐 1986「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』
② ♪ 1991「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』
③ ♪ 1991「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』
④ ♪ 2001「瀬戸大窯製品の生産と流通—研究の現状と課題—」『瀬戸大窯とその時代シンポジウム資料集』
⑤ ♪ 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター『研究紀要』第10輯
以下, 本文中の引用箇所は上掲論文による。なお, 各期の呼称については, 例えば井上喜久男氏の五期区分があるなど, その対応関係が問題となるが, ここでは以後, 藤沢氏の四期区分に従った。
- (12) 「古瀬戸」とは, 中世の瀬戸窯において生産された施釉陶器を指し, 前・中・後の3期4区分され, この内, 後期は14世紀末~15世紀に該当する。それゆえ, 中世といっても, 窯体構造や生産器種の異なる15世紀末~16世紀代の大窯期までを含むものではない。
- (13) 小野正敏 1991「房総の城館出土中世陶磁器の問題」『千葉史学』18号
- (14) 井上哲朗 1994『印西町 小林城跡』財団法人千葉県文化財センター
- (15) 井上哲朗 1998「鹿島川流域における戦国期城館の一形態—四街道市北ノ作遺跡の調査から—」『研究連絡誌』第53号
財団法人千葉県文化財センター
- (16) 道沢 明 2000『篠本城跡・城山遺跡』財団法人東総文化財センター
- (17) 柴田龍司 2000「村落型城郭から都市型城郭へ」『千葉城郭研究』第3号
- (18) その研究実績としては例えば, 中野晴久「赤羽・中野「生産地における編年について」」『「中世常滑焼をおって」資料集』
1993 日本福祉大学知多半島総合研究所
- (19) 鳴田浩司 2000「出土遺物について」『研究紀要』20号 財団法人千葉県文化財センター
なお, ほかに築瀬論文も参照されたい。
①築瀬裕一 2002「大野城跡のカワラケの検討」『大野城跡発掘調査報告書』夷隅町教育委員会
② ♪ 2001『千葉市源町遺跡群—高津辺田遺跡・南屋敷遺跡—』財団法人千葉市文化財調査協会
- (20) 例えば, 『板碑の総合研究』2 千葉県, でその傾向は明瞭ながら, 個別には鎌ヶ谷市万福寺が好例といえる（「万福寺板碑発掘調査報告書」『鎌ヶ谷市史料集』11）。ただこの点, 武蔵板碑と下総板碑では多少事情が異なるし, 地域によっても相違がある。
- (21) 例えば, 栗原町台遺跡では, 出土した8点の内, 5点が飯岡石, 2点が緑泥片岩, 1点が雲母片岩で, 後2者がそれぞれ武蔵, 下総板碑に当たる（原田享二 1999『主要地方道成田小見川鹿島港線一沢工区の埋蔵文化財発掘調査報告書—』財団法

人香取郡市文化財センター)。

- (22) ①早川正司 1992「安房清澄寺の石幡と石工橘氏について」『房総の石仏』第8号
 ② 1992「南房総板碑」小考『千葉文華』第27号
- (23) 小高春雄 2003「寄贈資料紹介 題目板碑」『総南博物館報』第69号
- (24) 川戸 彰 1988「清澄寺の梵鐘・石造物・経筒」『千葉文華』第23号
- (25) 境内墓地の裏山内にこれら宝篋印塔が散乱する。
- (26) ①黒沢哲郎 1993『大慈恩寺遺跡』 大栄町教育委員会
 ② 1999「大慈恩寺遺跡(2)」 大栄町教育委員会
- (27) 篠崎四郎「銚子市足利時代石塔群調査報告」『銚子市史』に報告があるが、齋木論文でより詳しい。
 ①齋木 勝 1983「房総五輪塔小考」『研究連絡誌』第3号 財団法人千葉県文化財センター
 ② 1980「房総宝篋印塔考」『物質文化』35 物質文化研究会
- (28) 小高春雄 1998「佐倉市海隣寺の千葉氏石塔群について」『千葉城郭研究』第5号 千葉城郭研究会
- (29) 境内墓地に中世の石塔群が存在する。その実態については筆者計測による。
- (30) 註27齋木1980による。
- (31) 鈴木 昭 2003『千葉県鴨川市 湯貴田遺跡・花輪遺跡』 財団法人総南文化財センター
- (32) 註16道沢文献
- (33) 註26黒沢2000年文献
- (34) 次の文献が挙げられる。
 ①永井久美男編 1996『中世の出土銭 補遺Ⅰ』 兵庫埋蔵銭調査会
 ②鈴木公雄 1992「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」『史学』61—3, 4
 ③ 1999『出土銭貨の研究』
- (35) 小高春雄 2001「千葉県下の大量出土銭」『出土銭貨』第16号 出土銭貨研究会
- (36) 註34鈴木1999による。
- (37) 岸本雅人 1998「千葉東南部ニュータウン20—千葉市有吉北貝塚2(古墳時代以降)—」 財団法人千葉県文化財センター
- (38) 津田芳男ほか 1990『桂遺跡群発掘報告書』 財団法人長生郡市文化財センター
- (39) 林田利之 1992『駒井野荒追遺跡』 財団法人印旛郡市文化財センター
- (40) 柿沼修平ほか 1988『千葉県大栄町 長久保・内野遺跡—中世遺構の調査—』 千葉県大栄町遺跡調査会
- (41) 中世総点数から不明銭種数を引いた数を分母とした。実際は、永楽銭を始めとする明銭は銭文が明瞭であるから、不明としたものは長く流通した唐・宋銭の可能性が高く、分母は更に若干増えることとなろう。以下同。
- (42) 山下亮介ほか 1996『土気南遺跡群Ⅶ』 財団法人千葉市文化財調査協会
- (43) 註8戸倉文献
- (44) 相京邦彦 2003『東関東自動車道(千葉富津線)埋蔵文化財調査報告書14—木更津市笹子城跡—』 財団法人千葉県文化財センター
- (45) ①峰村 篤 1997『根木内遺跡第4地点発掘調査報告書』 松戸市遺跡調査会
 ②中野修秀ほか 2004『根木内遺跡第2地点発掘調査報告書』 松戸市遺跡調査会
- (46) 木内達彦 1995『本佐倉城跡発掘調査報告書—戦国佐倉城の調査—』 酒々井町
- (47) 木内達彦 1990『千葉県印旛郡酒々井町 長勝寺脇館跡』 財団法人印旛郡市文化財センター

- (48) 青木幸一 1989『千葉県大栄町 馬洗城址発掘調査報告書』大栄町教育委員会
- (49) 斉藤 毅ほか 1991『千葉県四街道市 和良比遺跡発掘調査報告書』財団法人印旛郡市文化財センター
- (50) 鬼澤昭夫 2001『大崎城跡』財団法人香取郡市文化財センター
- (51) 岡村真文ほか 1981『鹿島前遺跡－第3次発掘調査概報－』他 我孫子市教育委員会
 なお、この点、16世紀代ではほぼ完結する東金市前畑遺跡との相違も明瞭である。
 香取正彦ほか 2002『千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書―東金市前畑遺跡・羽戸遺跡―』財団法人千葉県文化財センター
- (52) ①菊池健一 2000『千葉市生実城跡』千葉市教育委員会
 ②長原 亘 2002『千葉市生実城跡』千葉市教育委員会
- (53) 岩崎卓也ほか 1970『大谷口』松戸市教育委員会
- (54) 例えば一宮城の場合では、明銭が30%を占め、かつ15世紀後半初鑄の安南銭（延寧通寶：初鑄年1454）が加わることによって、よりその位置付けが明確となる。また、多くが火災で溶融している点も文献上との対応を可能とする。
- (55) 北条宗哲書状「大藤文書」『戦国遺文』後北条氏編第一巻 687号
- (56) 北条氏康書状「穴八幡神社文書」『戦国遺文』後北条氏編第二巻 1158号
- (57) 北条家着到定書「内閣文庫蔵豊島宮城文書」『戦国遺文』後北条氏編第二巻 1570号
- (58) 北条氏政軍役割付写「神保文書」『上総井田文書』横芝町教育委員会
- (59) 上杉謙信書状「上杉家文書」『埼玉県史』資料編6 839号
- (60) 註9 両文献
- (61) 註52文献
- (62) 岡田光広 1989『関宿城跡』財団法人千葉県文化財センター
- (63) 風間俊人 2003『重要遺跡確認 大野城跡』財団法人総南文化財センター
- (64) 筆者発掘調査時に実見。
- (65) ほかに、鴨川市西郷氏館跡（中世）をあげる場合もあるが、筆者は検出されている遺構からは未だ慎重であるべきと考える。
 杉山春信ほか 2000『千葉県鴨川市 東条地区遺跡群発掘調査報告書』鴨川市教育委員会
- (66) 大和久震平ほか 1983『埴谷周路遺跡』山武町教育委員会
- (67) 大橋康二ほか 1986『下総国四街道地域の遺跡調査報告書』中野遺跡調査団
- (68) 築瀬裕一 2001『千葉市源町遺跡群―高津辺田遺跡・南屋敷遺跡―』財団法人千葉市文化財調査協会
- (69) 註8 戸倉文献
- (70) 註44相京文献
- (71) 註50長原文献
- (72) ①高谷英一 1996『上本佐倉上宿発掘調査報告書―本佐倉城下町の調査―』財団法人印旛郡市文化財センター
 ②香取正彦ほか 1997『酒々井町上本佐倉上宿遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- (73) 長南城跡については『千葉県の歴史』資料編中世1、勝見城については『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』、
 万木・勝浦については『夷隅の城』所載の図をそれぞれ参照のこと。
- (74) 註47青木文献
- (75) 黒沢哲郎 2000「久井崎城跡」『千葉県の歴史』資料編中世1
- (76) 註46木内文献